

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

書評と紹介：

森山工著『墓を生きる人々—マダガスカル、シハナカにおける社会的実践』東京大学出版会

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5772

書評と紹介

森山工著

『墓を生きる人々—マダガスカル、シハナカにおける社会的実践』
東京大学出版会、1996年、iv+308頁

飯田 卓*

アフリカ地域に属しながら、大陸と隔たれていたゆえに独自の生物相と文化・社会が発達したマダガスカル。本書は、その中央高地の一角に住むシハナカの人々と集合墓のかかわりに関する、気鋭の人類学者のフィールドワークの成果である。文体や論理展開が難解な部分もあるが、それは、現地調査で得た資料を批判的に解釈するという著者の姿勢が徹底しているためである。本書の伝えるメッセージの重要さは、見かけ上の難解さを補って余りある。本書により、著者は第24回渋沢賞を受賞した。

評者は、本書から四つの問題を主題として読みとった。第一に、これまでのマダガスカル研究で実体的にあつかわれてきたような親族集団もしくは出自集団が、シハナカ社会にも見られるかという問題。第二に、シハナカの人々はどのようにして自分の葬られる墓を選択しているのかという問題。第三に、墓をめぐる実践が今後どのように変化していくのかという問題。第四に、人類学者の限られた経験から一般的記述としての民族誌をどのように書くかという問題。これら四つの主題がくりかえし交互にあらわれては背景に消えていくさまは、本書の魅力のひとつである。だがこの短い書評では、その順を追って本書の内容を紹介することはできない。そこで、やや無骨な方法ではあるが、評者にとって重要と思われるこれらの問題を解きほぐし、別々に取り出したうえで紹介することにしたい。

まず、第一の「マダガスカル研究で実体的にあつかわれてきたような親族集団もしくは出自集団が、シハナカ社会にも見られるか」という問題を見てみよう。マダガスカル諸社会に関する民族誌の多くは、集団論の立場から書かれていると著者は指摘する。たとえばモーリス・ブロックは、出自を共有する内婚集団であり地縁集団でもある「カラザナ」を焦点に据え、メリナ社会を構成する基本的集団として描いてみせた。シハナカ社会についても、著者に先立って調査をおこなったポール・オッテイーノが、墓への被埋葬権やクラン成員権は父系的に継承されると報告している。そこで、本書の著者も、シハナカの人々が複数の父系出自集団に区分されており、父系出自集団ごとに墓を共有しているのだと想定した。ところが、シハナカ自身との対話のすえに明らかになるのは、そのような父系出自集団などシハナカ社会には存在しないということであった(第2章)。

著者はさらに、禁忌の継承や居住地の決定の分析を通して、親族集団の有無を検討する(第4章、第5章)。また、耕地や牛のような相続財は何かの集団の内部で継承されるのではないかと想定してみる(第5章)。そしてけっきょく、個人の生死を超えて永続するような親族集団がシハナカ社会では見いだせないと結論する。実はこの結論は、従来のマダガスカル社会の研究と比べ、独自の視点を本書に提供している。著者は、対象社会内に見られるさまざまな集団の有機的連関を分析するような集団論をしりぞけ、「現地の誰彼の具体的なことばや振る舞いとのかかわりで」対象社会を考察する(あとがき)という方針をとっている。

その方針のもとに展開されているのが、第二・第三の問題に関する議論である。第二の問題とは、「シハナカの人々はどのようにして自分の葬られる墓を選択しているのか」というものである。シハナカ社会では、父が被埋葬権を有していた墓のすべてと、母が被埋葬権を有していた墓のすべてに対して、子は被埋葬権を有する。つまり原則的には、シハナカは無数の墓に対して被埋葬権を有している。これら無数の墓は、二つの段階を経てただ一つに選択される。

*京都大学

まず、ある個人が被埋葬権を有している墓の名のほとんどは、上の世代から伝え聞く際に抜け落ちてしまう。抜け落ちる墓の名は多くのばあい、その個人が居住している村の外部から婚入してきた先祖のものである。このため、ひとりのシハナカが被埋葬権を有する墓として実際に認知しているのは、せいぜい数個にすぎない（第6章）。次に、この数個の墓は、故人の埋葬に際してただ一つに絞り込まれる。シハナカの人々によれば、故人を埋葬すべき墓とは、故人と「気があった」者が埋葬されている墓、あるいは故人の「慣れ親しんだ」墓である。だが、情緒的な価値にもとづいて選択がおこなわれるからといって、政治的・経済的な要因が考慮されないわけではない。墓の選択に影響する要因は、個別の事例によってさまざまであるため、情緒的な理由によって選択されるというかたちでしか一般化できないのである（第7章）。

墓の選択というこの問題は、従来の集団論的研究では見過ごされてきた。たとえば、先に述べたメリナ社会の民族誌では、埋葬の段階で複数の墓が一つに選択されることが指摘されている（Bloch, 1994: 115）。しかし、その具体的な状況については立ち入った検討がおこなわれていなかった。これに対し本書では、生前の人間関係を考慮して墓が選択される様子が、多数の事例から示されている。これらの事例を読み解くことにより、シハナカにとって死という非日常的な問題が日常生活と密接に結びついていることが明らかになっていく。この問題をめぐる各章は、民族誌としての本書の醍醐味がもっともよく表れた部分であろう。

さて、本書で扱う第三の問題は、墓をめぐる実践の時代的な変化である。著者はとくに、現代になって新しく生じた変化に注目する。たとえば、土墓から石墓へという墓の素材の変化と、それともなう一連の変化である。建造物の形をとる石墓は、多大な出費をともなう定期的な補修を必要とする。このため、石墓が主流となった1970年代以降、補修のたびに大々的に儀礼が催されるようになり、墓の中の遺体と対面する機会が増えた（第3章）。それだけではない。従来の土墓においては、

墓に葬られている古い祖先の名は忘れ去られ、その遺体も墓の中で風化するにまかされていた。ところが、いくつかの石墓では、埋葬された死者の名すべてが壁面に記されるようになった。このことは、死者の肖像としての写真や、風化した遺体の散逸を防ぐ厚手のビニールとともに、死者の個性を保持するのに役立っている。忘却あるいは風化散逸にまかされていた死者の名や図像や遺体は、これらの変化により、抽象的な「祖先」でなく個性を持った死者として生者とかわるようになったのである。ただ、このような変化が最終的にどのような意味を持つかについては、著者は即断を避ける。本書の末尾で、著者は「死者の個性をめぐる新たな態度の展開をみきわめるうえでは、それ（著者の現地調査）は逆に早すぎた」と述べて本書を締めくくっている（終章）。

ところで、このように観察や経験の記述においては綿密であるいっぽう、その解釈においてきわめて慎重な語り口は、結びの部分にかぎったことではない。このことは本書の随所に見られ、評者の要約からも断片的にうかがえることと思う。このことは、「限られた経験から一般的記述としての民族誌をどのように書くか」という第四の問題に通底しており、この問題が本書においてきわめて大きな主題であることを示している。

そこで、この第四の問題に移ろう。実は、本書の序章「わたしは誰について語るのか」は、この問題に取り組むことから始まっている。シハナカの人々を対象として民族誌を書くとする著者は、「シハナカとは誰であるのか」と問いかける。しかしこの問いかけは、多分に恣意性を含んでいる。なぜなら、シハナカのことを知る以前に、ある範囲の人々をシハナカとして措定してしまっており、しかもその区分が記述の対象として有意味であることを想定しているからである。いいかえれば、この問いかけは、すでに答えを知ったうえでなければなされえないはずのものである。このため、民族誌を書く際の最初の手続きとしてこの問いが発せられると矛盾が生じる。このような矛盾は、もっと後の段階になって、たとえば「結婚」や「供儀」といったような概念を用いる際にも立ち現れ

る。民族誌家の経験の断片を何らかの概念に当てはめることによって一般化すること——これこそ「解釈」という営みにほかならない——を目指すかぎり、避けられない矛盾と言ってよい。

このような「解釈的状况」に対し、著者は真正面から取り組もうとする。すなわち、解釈にともなう矛盾を引き受け、あくまでシハナカを民族誌の対象にすえる。だが著者は、同時に、現実に照らして妥当な民族誌を書くことをも目指している。その努力の跡の一つが、本書の随所に見られる、著者自身の経験にもとづく細かな記述である。このような記述があつてはじめて、民族誌全体が現実に即しているかどうかを判断する可能性が読者に開かれるようになる。つまり本書は、その語り口からして「限られた経験から一般的記述としての民族誌をどのように書くか」という問いに答えようとしている。その点で、非常に真摯な態度で記述された民族誌だといえよう。

以上に示されるとおり、本書は、従来の研究に対するユニークさ、民族誌的なおもしろさ、真摯に民族誌を記述する態度、これらすべてを十分に盛り込んでいる。マダガスカル社会の研究を始めただばかりの評者にとっても、細部にわたって盛り込まれた民族誌的情報はきわめて刺激的であった。本書は、今後増えていくであろう日本のマダガスカル研究のみならず、広く人類学一般にとって、記念碑的な著作となるだろう。

参考文献

- Bloch, M. 1994 (1971). *Placing the Dead: Tombs, Ancestral Villages, and Kinship Organization in Madagascar*, Waveland Press, Illinois.